



今も私の胸に 刺さっている言葉

秋山千佳 ジャーナリスト
Akiyama Chika



『実像 広島の「ばっちゃん」
中本忠子の真実』
発行：KADOKAWA
定価：1,700円（+税）

数年前のこと。取材で親しくなった10代の子がこんな話を切り出した。家の食料が底を尽きて現金は200円ちょっとしかない日に、それを切符に変えて街へ出て、見知らぬおじさんから5千円もらって家族の食事を買ったんだ。見返りに要求されたのは性的な行為だった、とも。

目を見開いた私の表情で、その子は責められたように感じたのかもしれない。早口で続けた。

「じゃあどうすればよかったですか？」

今も私の胸に刺さっている言葉だ。

その子だけでなく、各地の小中学校を取材していると、給食だけが一日で唯一まともな食事という子は決して珍しくない。近所に子ども食堂があれば、と思う人もいるかもしれない。だが大方の子ども食堂は毎日開いてはいない。無料の場合でも対象が子ども

だけだと家族の手前、敬遠する子もいる。さらに、学業に専念できる環境にない彼らは概して学校からこぼれ落ちやすく、社会との接点も失いがちだ。

そんな子たちを支える居場所はないか、と思っていた時に会ったのが、非行少年らに40年近く日夜手料理を振る舞ってきた元保護司の女性だった。子どもだけでなく親まで受け止め、支援を年齢で区切らず皆を「うちの子」と呼び、彼らの孤独と空腹を満たす。常人離れした活動だが、なぜ続けてこられたのか——。その女性や「うちの子」たちを取材してまとめたのが、拙著『実像 広島の「ばっちゃん」中本忠子の真実』（KADOKAWA）だ。

新型コロナウイルスの影響で学校が休校になった先ごろ、その中本さんに電話すると、命綱の給食がなく困っている子たちに弁当を作って渡

しているという。

「空腹はそれでええけど、3密を避けると居場所がないじゃない？ じゃけん、孤独の分は電話で話を聞くことにしとるよ」

広島弁で朗らかに語る中本さんの活動をそのまま真似はできなくとも、その精神に学ぶことは誰にもできる。そうだ、私も今では食べられるようになったあの子に久々に連絡してみよう。

あきやま・ちか

1980年生まれ。東京都出身。ジャーナリスト。早稲田大学政治経済学部卒業後、朝日新聞入社。記者として、広島、大津の両総局を経て、大阪社会部、東京社会部で事件や教育などを担当。2013年に退社し、フリーに。九州女子短期大学特別客員教授。著書に『実像 広島の「ばっちゃん」中本忠子の真実』（KADOKAWA）、『ルポ 保健室 子どもの貧困・虐待・性のリアル』（朝日新書）、『戸籍のない日本人』（双葉新書）。『文藝春秋』や「Yahoo!ニュース特集」などに寄稿。「子どもの貧困」や「若者を取りまく生きづらさ」などをテーマに講演を行っている。
<http://akiyamachika.com/>